



TITLE:

鮮・満・支の旅行記(I)

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 鮮・満・支の旅行記(I). 天界 1935, 16(176): 54-56

ISSUE DATE:

1935-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167146>

RIGHT:

鮮・滿・支の旅行記 (I)

(山 本 生)

今春以來、東亞地方の旅行を計畫し、早く出張の辭令を頂いてゐたのであるが、特に今年は夏ちう公務多忙で、殆んど寸暇も無い有様であつたので、旅行出發の時機が延び々々になつてゐた。しかし、もはや秋にもなつて年内の餘日も少く、又、氣候も追々寒冷になるのを恐れて、去る十月初旬、身邊を無理に整理して、ともかく立つことにした。

1935年十月9日〔水曜〕の午後、甲子園の私用を終へて、23時27分に「富士號」により大阪驛を發車した。

十月10日〔木曜〕8時30分、下關着、釜山への連絡船に乗り換へる間、長府の淺野君に會ひ、黃道光課の諸問題につき打ち合はせ、意見の交換などする。船は景福丸で、10時30分に出帆、今まで幾度も此の海峡を越えたが、晝の便は今度が始めてで、景色に見とれる。對馬と朝鮮とが意外に近い間隔なので驚く。尤も、天氣が非常によく、遠望がきく。——日鮮の間に挟まつて、對馬の政治はさぞ昔からウルサイことであつたらうと察せられる。

18時、釜山に着、直ちに「アジア」に乗り換へ、19時20分に發車。雑誌など讀むうち、21時33分に豫定の如く大邱着、約束により驛で W. C. Rufus 教授と H. M. Bruen 師とに迎えられ、明日の打ち合はせをした後、別れて、自分は「つたや」に投宿、就寢までに街路を暫く散歩。

十月11日〔金曜〕朝9時、約の如く、Rufus 氏夫妻と共に、Bruen 師の自動車に乗せて貰つて、古蹟視察のため、新羅の古都慶州に向ふ。Rufus 氏は頻りに「17年ぶりだ」と繰り返される。とにかく、もう殆んど何事も記憶には無いらしい。11時頃、多くの古墳丘の連続する中を通つて、先づ洪武王の陵と龜趺とを見る。

それから「金冠塚」を見、次で博物館に入る。第一に有名な大鐘を見、それより別館内の石笛を見る。此の笛にある銘が面白いからとて、特に館長に頼んで、事務室まで持ち出して、文字や模様を詳しく調査した。洪武何年とあ

るが、**「瞻星臺」**の繪と、二つの星宿が畫かれてある。北斗と南斗らしい。Rufus 氏は十二支の石像がある筈だと言つて搜されるが、**「見當らない。只、日時計の一部らしいものが珍らしい形で見當つた。本館の後庭に『昔、外國人を排斥した立札だ』と Rufus 氏が言はれるものを見る。」**

博物館を出て、待望の**「瞻星臺」**を見る。寫眞で見た通り、少しく北へ傾き、危く崩れさうだが、Rufus 夫人が大ハシヤギ、よち登らうとされる所をカメラに収め、尙ほ四人で色々と測量調査する。どうも**「瞻星臺」**として腑に落ちない點があるのだが、尙よく考へることとして、正午過ぎ、**「佛國寺に行く。」**

取り敢へず、門前庭で持參のランチを食し、それから寺の内外を見る。之は只一通りの寺で、二つの有名な塔を面白いと思つた外、大して興味はない。——少憩後、徒歩で裏山に登り々々、石窟内の佛像を見に行く。道は案外遠く、急峻であるが、割に疲れない。四方の景色が美しい。峠で Japan Sea が見える!!と言はれたが、もやで見えない。

それから引き返して、半月城、氷室、五陵など、大急ぎで多くの古蹟を見、日の暮れる頃、元の道を大邱に歸る。——18時頃、車上で、西の山に没する太陽の緑閃光を Rufus 氏と共に見て喜ぶ。自分が地平上に緑閃光を見たのは之れで二度目である。(初回は今春京都で見た)

十月12日〔土曜〕 9時42分 Rufus 夫妻と同車して大邱發、15時20分京城着、笠谷氏や横瀬氏等に迎えられ、下車後先づ、Rufus 氏等に案内されて延禧專門學校長 Underwood 氏宅に行き、暫く談笑した後、日没頃、旭町の横瀬氏宅に着。

十月13日〔日曜〕 朝10時から組合教會で禮拜、午餐を頂いた後、約束により Rufus 氏等と同道で、15時10發の汽車に乗り、仁川へ行き、總督府觀測所を訪ねた。休日にも拘らず、國富所長以下所員各位の歓迎を受け、朝鮮の天文氣象に關する古記録や古蹟等について談話の後、館内館外の諸設備を參觀した。古い雨量計や日時計など興味を惹いた。それから市内の公園や月尾島あたりをドライブし、折から満潮の仁川港灣あたりを珍らしく眺めた。海岸丘上で恰も水平線に日没を見たが、もやのためか、緑閃光は見えなかつた。18時過の仁川發列車で歸城。驛食堂で晚餐、それから別れて歸宿。

十月十四日〔月曜〕 朝9時、豫約の如く延禧専門學校を再訪、Rufus、李兩教授に迎えられ、校長 H. H. Underwood 博士や教頭愈氏（舊友）に面會。それから校内全部を參觀した。博物展覽室は興味深く、又、理學館屋上の15種屈折望遠鏡は Rufus 氏前任時代以來のもので、思ひ出は深いらしい。之れを修理して使用するやう勧めた。圖書室では Rufus 氏指導の下に、目下朝鮮の全時代に於ける天文文獻目錄を作製中である。

午餐は Underwood 校長宅で頂き、山極女史其の他に會つた後、15時豫定により Rufus 氏と同道、京城帝國大學を訪ね、圖書館に所藏されてゐる天文關係文書を見た。それから二人で山田總長に面接、折から明日臺覽準備中の古地圖等を總長自ら案内された。

夜は19時30分から公會堂で天文講演をした。

十月十五日〔火曜〕 朝1時から又 Rufus、李兩氏と三人づれで 昌景苑博物館を參觀、新古兩面の天文分野圖や日時計、雨量計、漏刻等の屋外にあるものを詳細に見た。この新圖の方は1913年に Rufus 氏が R. Asiat. S. Transaction に發表したものである。雨量計は A. D. 1442年のものと推定される。又、漏刻は1536年 A. D. のものである。日時計は平盤二つ、凹球一個で、皆 $37^{\circ}39'15''$ といふ緯度を刻してゐる。それから屋内にある八九點の天文儀器を見たが、中には一見して用途の不明なものが二つ三つある。後、館長に挨拶した。

それから Rufus 氏の先導で桂洞の金在洙氏宅所藏の精巧な時計を見た。次で京城耶蘇教書會や仁寺洞の翰南書林、文光書林等へ行つて古書をあさり、16時頃 Rufus 氏等と茲に別れることとなつた。

自分は、Tailor 商會で只一部残されてゐる天文分野圖の石刷を買ひ、それから、長谷川町の青年會館で、滋賀縣膳所中學同窓會、Y's men's Club、學生 YMCA 聯合會等へ順次に出席した。（つゞく）

□ 寄稿者紹介 □（十二月號）

★ 小山 秋 雄氏（倉敷天文臺の器械改裝について）

理學士、花山天文臺員にして臨時倉敷天文臺に出張研究中、變光星天文學を専攻し、觀測界の重鎮、變光星課長として觀測部員をよく統率指導し、目下部内を隆盛ならしむ、エスペラントに饒通す。

（現住所 岡山縣倉敷市住吉町）